

幼児期の愛着形成重要

「DVや虐待」考える研修会 水戸

DV(ドメスティックバイオレンス)や虐待被害の経験が人生に及ぼす影響を考えようと、NPO法人ウィメンズネット「らいず」(三富和代表理事)は5日、水戸市見和の常磐大で、酪農学園大(北海道)教授で公認心理師の須賀朋子さん(53)を招き、研修交流会を開いた。行政担当者や教育関係者80人が会場とオンラインで参加した。須賀さんは「いじめやDVなどの経験はトラウマになる。その症状に気付いて、自分を大切にしていこう」と力を込めた。

須賀さんは元東京都内の公立学校教諭。元夫からのDVがきっかけで、DVの予防の研究に専念し、2012年筑波大学大学院に進学。15年同大学院博士後期課程ヒューマン・ケア科学社会精神保健学分野を修了。DVや虐待などをテーマにした研究を続けている。

冒頭で18年に東京都目黒区で起きた船戸結愛ちゃん(当時5歳)の虐待



自身の経験談も交えながら、「愛着」が子どもに与える影響を講話した酪農学園大教授の須賀朋子さん＝水戸市見和の常磐大

絆が生まれる。須賀さんは「愛着イコール安全基地。安定した愛着だったか、不安定だったかで子どもの生涯に大きな違いが出る」と語った。

虐待を経験した子どもについては、何をしても救われないことを学んでいるため、「他人の声や表情に非常に敏感。自己防衛のため強そうなふりをする」と特徴を挙げた。

さらに、子どもの時に「安全」と「危険」を区別するのが難しいと言及。そのため、DVが原因で離婚したのに、暴力的な人と再婚してしまうのは、「自分の『愛着』の問題に気付かないと、繰り返してしまう」と指摘した。

DVや虐待を受けた人は、身近な人に裏切られ、

「安心できる人つながりを」酪農学園大教授 須賀

「頼れない」という感覚を持っている。須賀さんは「安全で安心できる人とのつながりを持ち、『助けて』と言えるようになることが大切」と強調した。

続く意見交換会では、「生きづらさ」にどう寄り添うかをテーマに、常磐大副学長の村井文江さんが課題提起したほか、水戸市子育て支援課の担当者によって児童虐待やDV相談の現状が報告された。

研修交流会はオンライン配信で視聴可能。要申し込み。メールに件名「らいず研修交流会オンライン」を明記。アドレスはsupport@npo-risui.info。締め切りは3月3日。申し込み後、動画のリンク先を送る。問い合わせはNPO法人ウィメンズネット「らいず」(026)7242。(鈴木聡美)



意見交換会では常磐大副学長の村井文江さん(右)が課題を提起した